

『青木周蔵筆記』の詩と真実

——渡独前の経歴を中心として——

森 川 潤

はじめに

青木周蔵は、いつのころから自伝をつづりはじめる。ヨーロッパから帰国した明治三十一（一八九八）年にはのブ
ロイセンにおける留学生活のはじまり（第二）⁽¹⁾について起稿する。自伝の自筆草稿本は、『青木周蔵筆記』として国
立国会図書館憲政資料室の「青木周蔵関係文書」におさめられている。『筆記』は、第一から第二十七まで、補遺を
くわえ、全二十九章からなる。青木は、心のどこかに、いつか刊行されることを期待していたと思われる。しかし、
校注がほどこされ、平凡社東洋文庫の一冊として刊行されたのは、その没後半世紀あまり経た昭和四十五（一九七〇）
年のことである。

人が自己を語るのは、第一に自己探求や自己認識への欲求、第二に過去を回想することがもたらす快楽、第三に自
己の正当化への欲求があるからである。青木が自伝を執筆した主な動機は、外務大臣、アメリカ駐在大使といった外
交官としての行動について弁明するためであろう。しかし、それだけではない。

青木周蔵の渡独前の経歴については、『青木周蔵筆記』第一の記述によらざるをえない。『筆記』第一は自伝を完結

するために書いたものであり、いわば付け足しにすぎないかもしれない。しかし、自伝は自己認識の原点をさぐるように、のびやかに思春期から青春期にいたる周蔵を描いている。遠い過去を回顧するために、記憶違いや事実の誤認が散見されるが、自伝につきまとう意図的な粉飾や事実の歪曲はみられない。青木は、独自のレトリックを駆使し、語りかける。

青木周蔵は、天保十四（一八四四）年、萩藩西南部の吉田宰判土生村小土生おはぶの地下医三浦玄仲の長男に生まれる。三浦家は、代々、医業をいとなむ家柄である。慶応元（一八六五）年には萩藩の医家の名門青木家の養子にむかえられ、慶応四年に藩費留学生としてプロイセンへ派遣される。ベルリン留学中に明治六（一八七三）年に外務一等書記官心得に任命されて以来、一貫して外交官としての経歴をたどり、外務大臣にまで登りつめる。

本稿では、青木周蔵の自伝『青木周蔵筆記』第一に特徴的にみられるレトリックを分析することにより、青木が、自伝をとおして、どのようなメッセージをつたえようとしたのかあきらかにする。回顧者は青木周蔵または青木、回顧される立場としては周蔵と表記をかえる。引用は断片化し、必要な部分だけを引用し、『筆記』第一からの引用は注記しない。

一 疵 痕

地下医の長男に生まれた周蔵は、家業をつがなければならない。近世社会においては、医術開業免許制度もなく、希望するものはだれでも医業にたずさわることができた。農民が医者になるばあいには、庄屋や名主などをとおして代官や領主に届けて、許可をうける必要がある。それは、年貢の収納に関係するからである。⁽³⁾「百姓共之内、病身等二而無據醫師二相成度」⁽⁴⁾と願いで、剃髪すれば、すでに医者である。

萩藩では、藩医は儒者、書家、絵師、能狂言師、碁打などとともて芸能に携わるものとして寺社組に編入され、寺社奉行の管轄下におかれる。そのうち、とくに技能が熟達したものは、手廻組に編入され、手廻頭の支配下において、藩主に近侍し、その側近の職務に服する。⁽⁵⁾ 地下医は、藩医とはことなり、あくまでも個人の開業医であり、藩政府が安政三(一八五七)年六月に医業登録制度を導入するまでは、開放的な開業医制度のもとで自由に医業にたずさわることができた。

父玄仲は、地下医ながら、「所謂蘭方医ニシテ翻訳書ニ依リ少シク泰西文明ノ學術ヲ解セシ」人である。嘉永三年に藩内全域で種痘が実施されることになり、各宰判から陪臣の医者や地下医のなかから「巧者之者」が選抜されたとき、いわゆる種痘医にえらばれる。⁽⁷⁾ 家業をつぐためには、周蔵は初歩的な読み書きだけではなく、少なくとも漢方医学の基礎である漢学をまなばなければならない。しかし、就学の場を探すのに苦慮する。青木周蔵は、萩藩における当時の教育の状況について回顧する。

予年漸ク長シテ學ニ志セシカ封建治下ニ於ケル階級制度ノ桎梏ハ予ノ如キ平民子弟ノ講學ニ念アル者ヲシテ頗ル困難ヲ感セシメタリ防長ノ首府タル萩ニハ藩學明倫館アリ藩士吉田氏亦私塾ヲ開キテ名聲郷党ノ間ニ高カリシモ藩學ハ士族ノ子弟ニアラサレハ入門スルヲ許サス松下村塾亦藩士ト伍ヲ結フ者ニアラサレハ強テ其門ニ入ルモ學友トノ交際円滑ナラサルヲ予知セシメタルニ由リ予ノ為ニハ講學ノ道殆ント硬塞シタル有様ナリキ

青木によれば、藩校はもとより、松下村塾さえも門戸を閉ざしていた。青木が言及するのは尊攘運動の温床となつた松下村塾である。吉田松陰の門からは、いわゆる松下村塾グループが輩出され、松陰の刑死後、尊攘運動の先頭にあつようになる。松下村塾は、政治結社の性格をおびる。高杉晋作、久坂玄瑞などのような尊攘運動を牽引する藩士や伊藤博文、山県有朋などのように藩士と交遊があるものだけが松下村塾への入門を許される。

周蔵は、安政四（一八五七）年ころに寺子屋をおえる。吉田松陰が松下村塾を主宰したのは安政三年三月から安政五年十二月までである。しかし、周蔵は松下村塾には「入りたくて入り得なかった」⁽⁸⁾わけではない。実際、当時の周蔵の選択肢には松下村塾は入っていなかった。周蔵が住む藤曲村の近辺からは萩へ遊学する慣行はなかった。⁽⁹⁾

青木は、入門する気もなかった松下村塾に言及することによって、端なくも松下村塾と松下村塾グループにたいする姿勢を披瀝することになる。青木は、志士としての生き方を対極に置き、それとはまったく異なる生き方を選択したと宣言したことになる。

周蔵は、嘉永二（一八四九）年ころ、村の子どもたちとともに近所の寺子屋にかよいはじめる。安政四（一八五七）年には、萩藩永代家老の福原家が家臣の子弟のために領地の宇部村中尾に設置した郷学善我堂にうつる。善我堂は、もともと家臣だけでなく、近郷の農民や商人の子弟にも門戸をひらいていた。青木は、善我堂について次のように記す。其ノ家臣ノ子弟ハ予等領域外他村ノ子弟ニ対シ交際上常ニ一個ノ墻壁ヲ築キテ待遇自ラ疎遠ニ流レ一二例外ナキニアラサリシモ予ト学友トノ交際ハ充分親密ナルコト能ハサリキ

善我堂は一義的には武士の学校である。福原家の家臣の子弟は、周蔵などの家臣以外の子弟に障壁をささずき、学友との交際は親密ではなかった。周蔵は、善我堂において封建的階級の重庄を思い知らされる。陪臣とはいえ、武士が後述するような武闘集団としての側面を剥き出しにするとき、「平民」は悲哀を味あわされることになる。抑揚のない回顧のなかに、周蔵が負った精神的外傷の深さが窺われる。

青木は、善我堂について「程度低キ宇部ノ學校」と呼ぶ。周蔵が善我堂に通いはじめて一年あまりたった安政五（一八五八）年十二月になると、萩藩支藩の徳山藩主毛利広鎮^{ひろちか}の六男元佃^{もとぢん}が藩命により福原家の家督を継ぎ、越後と称する。福原家第二十四代当主となった越後は、学頭の佐々木向陽に「士氣奮發」のために『靖猷遺言』⁽¹⁰⁾を講じさせる。『靖

「献遺言」は、江戸前期の崎門派の朱子学者浅見綱齋の著作である。崎門派独特の大義名分論や尊王論は幕末の尊王討幕論に大きな思想的影響をおよぼす。吉田松陰も影響をうけたひとりである。

安政五年には、条約問題や将軍継嗣問題をめぐり政局が極点に達する。藩主毛利敬親は、翌八月に両相府諸員から提出された改革意見を集約し、六十三ヶ条からなる改革綱領をまとめる。その中核となるのが「御軍制之事」である。⁽¹¹⁾西洋にならった日常的な練兵の実施、海岸防備のための農兵の取り立てなどが盛り込まれる。敬親は、「總て御政治は復古之御主意に有之度」という基本方針をうちだす。⁽¹²⁾

越後は、翌六年十一月、宗家が推進する軍制改革について意見を具申する。⁽¹³⁾そのころの菁莪堂の「館中日程表」によれば、嘉永四(一八五二)年五月に向陽がさだめた「功令」⁽¹⁵⁾とは異なり、軍事訓練に多くの時間があてられ、講義をおこなわない日が多くなる。全藩軍事化のもとに、菁莪堂も軍事訓練を中心とした施設に変容する。青木にとって、軍事訓練を重視する菁莪堂は程度の低い学校でしかない。

周蔵は「階級制度ニ関係少ナキ地」をもとめ、中津にわたる。豊前は、周防灘をはさみ、周蔵の郷里の対岸に位置する。豊後日田の広瀬淡窓の私塾に入門したいという気持ちもあった。咸宜園の創設者である広瀬淡窓は安政三(一八五六)年十一月一日に他界し、周蔵が渡海したころには、淡窓の養子青邨が塾主となり、淡窓の弟旭荘の嫡子林外も講筵をはっていた。

私塾は藩校とはことなり、生国や身分を問わず、他藩からの遊学生を受け入れる。咸宜園には、大村益次郎をはじめ、萩藩から訪れる遊学生が少なくない。大村は、三田尻の蘭方医梅田幽齋から「醫者として大成するには、どうしても漢書に通ぜねばならぬ」と諭され、⁽¹⁶⁾咸宜園に遊学する。菁莪堂がある宇部村からも、安政二年以降、毎年のように、咸宜園に入門する者がいた。安政三年二月には周蔵が住む藤曲村から篠井数馬が入門する。⁽¹⁷⁾淡窓がいないとして

も、周蔵が咸宜園への遊学を考えたのは自然なことである。

中津にたどりつき、城郭を目のあたりにすると、周蔵は翻意する。はじめて目にする城郭は、藩政の中枢にほかならない。もつとも、萩藩の三十七万石に比べれば、中津藩は十万石の城郭にすぎない。広瀬淡窓は処士にすぎず、日田も藩政の中枢である城下町ではない。日田のような僻地は「隠者的ノ學問」を修めるのには適しているが、「将来ノ目的」をかなえることはできない。周蔵は、崇敬する同郷の先輩大村益次郎をはじめ、高野長英、岡研介、大村益次郎、上野彦馬といった人びとが咸宜園から巣立ったことを知らない。

中津には、奥平家の藩校進脩館もあり、藩校教授が家塾をひらいているはずである。郷関では、藩士との交遊を忌み嫌っていた周蔵は「奥平家ノ藩士ト交ハラハ便宜多カラン」と考え、手島物齋(仁太郎)の家塾である誠求堂に入門する。誠求堂では、中津藩士とともに切磋し、驥足をのばす。周蔵が忌み嫌っていたのは、尊攘運動に突き進みはじめた萩藩士とかれらと気脈を通じるものにほかならない。

周蔵は、宇部村の郷学菁莪堂においてはじめて武士に接する。豪放磊落な少年は、軍事訓練を中心とした施設に容れた菁莪堂から抛り出される。その原因は、尊攘論にあり、それを奉じる萩藩の武士にある。

二 暗 示

青木周蔵は、十六歳のころ、四書の素読ができるようになったころ、将来について考えていたことを次のように回想する。

将来修学ノ方針ニ就テハ恰モ五里霧中ノ感ナキニアラサリシモ幸ニ身体比較的強健ナリシカ為メ僻地ニ踞躡シテ
医ヲ学フカ如キハ何トナク物足ラヌ感アリタリ且勿論確タル方向ヲ定メ得タルニハ非レトモ何トカシテ国家ニ益

スル学問即チ政治ニ関係アル学問ヲ修メ漸次政治ニ参与スヘキ位置ヲ得ントスル感念模糊トシテ腦中ニ生セリ然ルニ之ニ必要ナル学問ハ程度低キ学部ノ学校ニテハ修ムルコト能ハス左リトテ藩学ニ入ルコト能ハサル身分ナレハ如何ニシテ此ノ目的ヲ達スヘキカ左思右考ノ末遂ニ笈ヲ他国ニ負ヒ階級制度ニ関係少ナキ地ヲ撰ヒ修学セント決心シ齡十七歳ニ至リ豊前中津ニ赴ケリ

周蔵は、すでに医者になることをものたりなく感じるようになっていた。それは、医者を継げば、僻地に閉じ込められるからである。漠然とした思いながら、「政治ニ関係アル学問」を修め、「政治ニ参与スヘキ位置」に就きたいと思ふようになったという。

しかし、幕末の日本に政治学のような学問は存在しない。当時の周蔵には想像することさえできないものである。プロイセンに赴いたのちに出会った学問である。また、萩藩でも政治にたずさわるのは地方の国相府の要員、江戸方の行相府の要員といった藩政の中枢にあるものにかぎられていた。封建的な階級社会においては、周蔵のような地下医の息子が「政治ニ参与スヘキ位置」について想像することもできない。もっとも、相応の家柄の家に養子に入れば、可能性はある。

いずれにせよ、「政治」という発想はこのときのものではない。「目的」と青木が呼ぶ将来の進路は、郷関から脱出するために考案した方便である。青木は、青木家の養子になったのちにも、医者という職業になじめず、そこから逃れようという想いを政治学という現実の到達点に仮託し、「政治ニ参与スヘキ位置」をえることを「目的」と位置づける。青木は、「目的」を「宿志」、「素志」とも表現し、暗黙のうちに了解されたものとして多用する。それは、郷関からの脱出、海外への逃避、医業の放棄へとつながるライトモチーフとなる。

周蔵は、中津の手島物斎のもとで刻苦勉励し、一年余りのちの文久元(一八六一)年五月には四、五十人の塾生のな

かで、「意外ニモ早く巳ニ高弟ノ斑ニ列セントスル」。しかし、翌二年閏八月に物齋が急逝する。物齋の実弟橋本塩巖（忠次郎）が多くの寄宿生や通学生のために誠求堂をひきつぐ。

周藏は、ある日、塩巖にさそわれ、かれの親戚筋にあたる福沢諭吉の実家をたずねる。老母於順のもとには、息子諭吉から手紙や写真がとどけられていた。周藏は、はじめて写真を見、塩巖と於順との会話を耳にする。諭吉は、中津藩の下級藩士の家に生まれながら、苦学の末に幕臣にとりたてられ、「重大ナル使命」を帯びた「北米合衆国ニ派遣セラルル使節」への随行を命じられたということである。実際には、写真は万延元（一八六〇）年の遣米使節に咸臨丸軍艦奉行木村撰津守の従僕として渡米したさいのものであり、このとき、文久元年十二月には外国奉行竹内保徳を正使とする遣欧使節の随員として渡欧する。

周藏は、のちに中津藩が「藩の公用についてのみならず、今日私の交際上、子供の交際」にいたるまで上下の区別がきびしい藩であること⁽¹⁸⁾を知る。きびしい身分差別にさいなまれていた諭吉はみずから習得した蘭学や英学によって封建的身分制度の壁を突き破り、幕臣にとりたてられる。周藏は「胸中自ラ一種ノ感慨」をおぼえる。「階級制度」の呪縛のなかで喘ぐ周藏にとって、みずからの才覚によって「封建門閥」の重圧をはらいのけた諭吉こそ、「我カ學フヘキ人」にほかならない。周藏は「福沢氏ノ方針」にならって努力すれば、「我カ目的」を達成できると確信する。

周藏にとって、諭吉はふたつの点で指標となる。ひとつは、語学の習得である。諭吉が獲得したのは外国奉行支配下の翻訳方という瑣末な地位にすぎないが、語学は封建的身分制の障壁を越える武器になりうる。諭吉は蘭学を英学へとおしひろげ、開国によって日本が組み込まれた国際社会のなかへ雄飛する。同郷の大村益次郎は地下医の家に生まれながら、蘭学を兵学や軍事学へとおしひろげることによって倒幕運動の先陣をきる萩藩の軍事部門の責任者という地位を獲得する。対外的危機意識がつよまれば、つよまるほど西欧の近代科学や近代文化の扉を開くための語学へ

の需要がたかまる。

もうひとつは、海外への視線である。周蔵は生まれ故郷の土生村や藤曲村から遠望できる海を隔てた世界にაცოგられていた。中津にわたり、諭吉をとおして、漠然としたものながらオランダ以外の西欧世界を垣間見る。それは周蔵が知る西洋医学の基礎としての蘭学とは異なる新鮮な学問を用意する世界でもある。塩巖が周蔵を同行したのは、周蔵の野心を見抜いていたからであろう。少なくとも福沢諭吉との邂逅により、周蔵の脳裏には、語学の学習、海外渡航という有力な選択肢が刻み込まれる。

周蔵は、医家のもとで蘭学を修得しようと決意する。塩巖のもとをはなれ、豪商富永家に寄食し、⁽¹⁹⁾蘭学の修業にとりかかる。塩巖から大江久、神尾雄策、藤本玄岱という三名の蘭方医を紹介される。中津藩は、前野良沢以来、蘭学の伝統があり、第五代藩主奥平昌高の時代に全盛期をむかえる。昌高は、藩医の大江春塘に蘭和辞書の編纂を命じ、文政五(一八二二)年に『バスタード辞書』(Bastard)を刊行する。寛政八(一七九六)年成稿の『波留麻和解』につづき、天保四(一八三三)年完成の『スーフ・ハルマ』に先駆けたものである。

中津藩でも、嘉永二(一八四九)年六月にジャワから長崎に牛痘漿と牛痘痂が届けられたときに、牛痘接種をはじめようという機運がたかまる。神尾雄策は、この年の十二月に藤野啓庵と連名で「種痘嘆願書」を藩主奥平昌服に提出し、藩医辛島正庵、藤本玄岱などとともに領民すべてに種痘を実施する。⁽²⁰⁾神尾雄策は、京都の漢蘭折衷の医家小石玄瑞のもとで修業する。藤本玄岱は、帆足万里のもとで儒学をまなんだのち、安政二年六月に大坂の適塾に入門する。福沢諭吉は三ヶ月前に入門していた。帰藩後は、村上玄秀、神尾雄策などとともに藩の医術を漢方医術から蘭方医術へと転換をはかる。⁽²¹⁾当時、中津には大江雲澤を当主とする鷹匠町大江家と大江春塘の血をひく京町大江家があった。⁽²²⁾大江久は、京町大江家の春塘の孫の代にあたる。

周蔵は大江久のもとで蘭学の修業をはじめた。大江久は、漢学の素養がゆたかで、多少蘭書をまなんでいたが、「文典」を習得した程度にすぎない。周蔵は蘭学の修業がはかどらないために、神尾雄策、藤本玄岱といった蘭方医のもとで蘭書の翻訳書である『氣海觀瀾』、『医範提綱』などを繕読する。『氣海觀瀾』は、青地林宗が文政十(一八二五)年に著述出版した日本で最初の物理的科学的の刊本であり、十九世紀初頭のヨーロッパの物理・化学の基礎的知識が簡潔に記述されている。『医範提綱』は、宇田川榛斎が文化二(一八〇五)年に刊行した簡潔な解剖学書であるが、解剖学だけでなく、生理学、病理学にまで言及し、当時の医家に愛用される。

オランダ語から翻訳された医学書や基礎科学書を読んだとしても、蘭学の修業にはならない。蘭方医学の修業そのものである。青木は、不自然さを感じながら、若い日々を率直に回想する。青木は、「福沢氏ノ方針」がいまだに当時の周蔵には内面化されていないことを暗示するために意図的に不自然な情景を描いたと思われる。

三 傍 観

文久二(一八六二)年、周蔵は中津の橋本塩巖の家塾で漢学を修業していた。ある日、塩巖から安政の大獄について知らされる。それについて、青木周蔵は次のように記す。

江戸ヨリ中津ニ着シタル某氏ノ書翰中前年江戸ニ起リシ一大疑獄ノ詳況ヲ報シ且当年志士ノ一人トシテ處刑セラレタル頼三樹三郎ノ排雲欲手掃妖・失脚墜来江戸城云々ト詠セシ彼ノ有名ナル七律一首ヲモ添附シ来リタルカ橋本氏ハ一日特ニ予ヲ招キテ之ヲ示シ此ノ詩ノ作者タル頼三樹三郎ハ実ニ学識ニ富メル有爲ノ士ナリ此ノ如キ名士ヲ殺戮シタルハ眞ニ徳川氏滅亡ノ前兆ナリト云ヘリ此ノ一事痛ク予ヲシテ感動セシメ世勢如何ニ成リ行クヘキヤト天下国家ノ将来ニ関シ始メテ幾多ノ疑惑ヲ抱カシムルニ至レリ

安政五(一八五八)年六月、大老井伊直弼は勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印し、さらに家茂の將軍継嗣問題を独断で決着する。安政五年九月から翌年にかけて、井伊はみずからの専断に反対する一橋慶喜擁立派の公卿、大名、志士にたいする徹底した弾圧を断行する。頼三樹三郎は、尊王攘夷論を唱え、將軍継嗣問題について一橋派と結び、はげしく幕政を攻撃し、安政六年十月に斬首される。萩藩の吉田松陰は違勅条約をはげしく糾弾し、井伊のもとで弾圧を強行する老中間部詮勝(まなべあきかつ)の暗殺を企てたとして江戸に送られる。安政六年十月に江戸伝馬町の獄において斬首刑に処される。

安政の大獄は松下村塾グループの人びとの反幕意識に火をつけることになる。高杉晋作は、帰藩の途上で悲報に接し、「実ニ私共モ子弟之交ヲ結ヒ候程之事故、仇ヲ報イ候ラハテ安心不仕候⁽²³⁾」と決意を述べている。尊王攘夷運動は、幕閣の専断を非難する運動となり、やがて反幕運動へと展開する。

塩巖は、頼三樹三郎の死を悼み、幕府の暴挙は徳川幕府滅亡の予兆であると非難し、周蔵にその「獄中作」と題する七言律詩を紹介する。周蔵は、尊皇思想を奉じる塩巖の言葉に感銘をうける。郷国が尊王攘夷運動で沸き立つなかで、僻地の地下医の家に生まれ育った周蔵は時代の流れに取り残されていた。中津において幕末の前途多端な政情をかいまみ、はじめて「天下国家ノ将来」に不安をいだくようになる。

『青木周蔵筆記』第一は、中津時代をもっとも長くあつかい、しかも詳細である。周蔵が親もとから離れ、みずからの意志で行動しはじめた多感な時期である。青木周蔵は、鮮烈な印象をのこしたためか、この一件について詳述する。しかし、この事件を「一大疑獄」と普通名詞で呼び、「安政の大獄」という歴史用語では呼ばない。

周蔵は、文久二年末、二年半あまり滞在中津をあとにする。青木周蔵は、その理由について次のように記す。

斯ル状況ノ中ニ予ノ齡十九歳ノ末トナリシカ世ハ尊攘ノ議論益々熾盛トナリ殊ニ長藩ニ於テハ幕府ノ因循ナル態

度ニ反シ関門通過ノ外国船舶ヲ砲撃スル準備ヲ為ス等漸次人心ヲ聳動スル形勢トナレリ之カ為メ長人ハ深く幕府及ヒ其ノ譜代各藩ノ忌ム所トナリ從テ中津藩ニ於テモ長人タル予ト同藩士トノ交際ハ親密ヲ欠クノ情況アルニ至リタレハ予ハ終ニ中津ヲ辞シテ郷里ニ帰レリ

萩藩は、文久二（一八六二）年七月、藩内改革派や久坂玄瑞などの尊攘派志士による尊攘論の激化により長井雅楽の航海遠略策を破棄し、藩是を公武合体から尊皇攘夷へと転換する。即今攘夷、破約攘夷といわれるものである。幕府が、文久三年四月に全国の大名に攘夷令を發布したのも、萩藩が違勅条約をむすんだ幕府に攘夷決行をせまったためである。翌五月に、萩藩は単独で攘夷実行にふみきる。幕府が調印した日米修好通商条約が天皇の意に反するとして、攘夷の姿勢を鮮明にし、実行すること自体反幕行為である。

周蔵は、公武合体派に激しく対立する尊攘派の拠点である萩藩の生まれである。しかし、その渦巻きの中に入ろうとはしない。周蔵は沸き立つような時の流れを対岸から傍観するだけである。譜代藩である中津藩をあとにしたのは、自藩が引き起こした政情が中津藩士との親密な交際のさまたげになるからであるという。周蔵はあたかも犠牲者として文久二（一八六二）年末に中津藩を去る。

周蔵は、翌文久三年には、蘭方医について本格的に蘭学を修めるために郷里から萩におもむく。侍医能美家に寄寓し、蘭学の修業にとりかかる。そのころ、文久三（一八六三）年に、奇兵隊への入隊を勧誘される。

此ノ時ニ方リ馬関ニ於テ奇兵隊ナルモノ組織セラレ予ノ友人数名モ其隊伍ニ班スル者アリテ頻リニ予ニ入隊ヲ勸メタルモノ一兵卒タルハ予ノ望ム所ニアラサルヲ以テ之ヲ謝絶シ一意西洋學ニ通センコトヲ欲セシモ如何セン階級制度尚未解除セラレサルヲ以テ予等平民ノ子弟ハ藩校ニ於テ教授ヲ受ルノ恩恵ニ浴スル能ハス

萩藩は、文久三（一八六三）年五月、下関海峡を通航する外国船を砲撃する。そのため、翌月には、米仏の艦船から

近代的兵器による報復攻撃を受け、支配階級である武士階級は無能さをさらけだす。藩政府は、窮状を打開するために、謹慎中の高杉晋作を登用する。高杉は、六月に下関において、封建的身分にかかわらない軍事力をあらたに編成し、奇兵隊と名づける。その後、相次いで同様の諸隊が結成され、奇兵隊とともに諸隊と総称される。

諸隊は、元治元年八月の四国連合艦隊の報復攻撃のさいにも奮戦する。元治二(一八六五)年一月の藩内の内訌戦で俗論派の藩正規軍を撃退し、正義派が討幕派として藩政府の主導権をにぎる。洋式兵制と武器を導入し、銃隊操練を繰り返した成果である。以後、諸隊は、萩藩の主力軍として第二次長州戦争、戊辰戦争に参戦し、つねに第一線にたつ。

周蔵は、奇兵隊への入隊を勧誘されたとき、「一兵卒タルハ予ノ望ム所ニアラサル」として謝絶する。周蔵の友人も、一兵卒になるのが目的ではない。奇兵隊の趣旨に賛同しただけであり、「一意西洋學ニ通センコトヲ欲」する気持ちは周蔵と変わらない。萩藩は、封建的家臣団の軍事力を補充するために、農民、町人などを藩の軍事体制に組み込んでいたが、周蔵は藩の軍事体制に組み込まれることを拒絶する。

慶応三年六月、周蔵は藩命により長崎にうつる。青木周蔵は、そのころの状況について次のように回想する。

是レ恰モ慶応三年ノ下半季乃至明治・元年ノ上半季ニシテ海内騒然特ニ長藩ノ如キハ一書生ノ運命ノ如キヲ顧慮スルニ暇ナク挙国王事ニ軼掌セシヲ以テ予ノ渡航ニ関スル命令ハ再三齟齬シタル末予ハ明治元年十月ニ至リ漸ク長崎ヲ発シテ字魯西遊學ノ途ニ上レリ

慶応三年一月、幕府は長州征討の解兵勅許を諸藩と萩藩に伝達し、長州戦争は正式に終結する。しかし、講和がむすばれたのではなく、敵対関係は解消されていない。以後、幕府の権威は急速に失われ、慶応三年後半から翌四年前半にかけて、大政奉還、王政復古の大号令、戊辰戦争と続くなかで幕府は崩壊する。萩藩は、挙藩体制で討幕運動の

先陣をきつてきた。藩としては、運命を賭した戦いの連続である。一書生の「運命」などを顧慮する余裕はないはずである。しかし、萩藩は激動のなかで一書生を長崎におくりだし、さらに海外へ派遣する。

萩藩が「挙国王事ニ軼掌セシ」ために渡航が延引されたのは事実であるが、周蔵はあたかも犠牲者であるかのよう
にふるまう。藩への帰属意識も希薄である。挙藩体制からみずから脱落し、自分の「運命」だけを考えながら、ひた
すら海外脱出を待ち望む。

老成した青木周蔵は、歴史の流れから孤立した若い日々について淡々と語る。萩藩の志士たちが倒幕運動に中心的
な役割を演じたのにたいし、若い周蔵は中津から帰ったのちも志士としての生き方を拒絶し、全藩軍事化の熱狂した
空間から遠ざかろうとする。数ヶ月、好生堂用掛に任命されたり、石州益田へ従軍したりしたとしても、それはあく
までも藩命によるものであり、みずからの意志ではない。

四 沈黙

青木周蔵は、一年あまりの長崎滞在については沈黙する。

周蔵は、文久三（一八六三）年には蘭方医について本格的に蘭学を修めるために萩におもむく。当時、萩には能美家
と青木家というふたつの医家の大家があった。能美家は、代々、藩主の侍医の家系であり、先代の洞庵は好生堂頭取
役として萩藩の医療行政と医学教育を掌握してきた。当主の隆庵は西洋学師範として医書と文法書を教授するが、あ
まり医業を好まず、漢籍に通暁する文人である。⁽²⁴⁾

新興の青木家は蘭方医学の家系である。周弼は周防大島の地下医の長男に生まれながら、天保十（一八三九）年に能
美洞庵と坪井信道の推輓により萩藩医に取り立てられ、洞庵の後継者として藩主侍医兼好生堂教諭役の地位をひきつ

ぐ。周弼は、文久二(一八六二)年の江戸勤番のさいに幕府の西洋医学所の頭取への就任を要請された⁽²⁵⁾ほどの蘭方医であり、蘭学者である。研蔵は、伊東玄朴のもとで修業し、弘化四(一八四七)年に萩藩の西洋書翻訳御用掛にとりたてられ、以後、西洋原書頭取役、西洋学師範掛などを歴任する。

周蔵は、父親から青木周弼の家塾に入門するようすすめられるが、能美家に寄寓し、蘭学の修業をはじめ。隆庵は能美家の家学ともいふべき道三流をうけつぐ本道医であり、蘭学の造詣がふかいわけではない。周蔵は、中津でも大江春塘の血をひく京町大江家の大江久につき、蘭学の修業がすまなかつた経験がある。師家の家系に異常なまでにこだわりをみせる。

周蔵は、元治元(一八六四)年春、萩藩の医学校好生堂への入門を許される。慶応元(一八六五)年十一月には、好生堂教諭役の青木研蔵の養子にむかえられる。妻帯者となり、「講学ノ自由ヲ束縛セラルルノ感」にさいなまれながら、なお「欧洲留学ノ希望」をいただき、好生堂の竹田祐伯や日野宗春だけでなく、木戸孝允にも懇願する。日野宗春や竹田祐伯は萩藩の医療行政の総帥である好生堂教諭の職にある研蔵を補佐し、養子周蔵の長崎遊学、海外留学についても担当していた。

青木周蔵は、「養父研蔵ニ請フテ画三年間欧洲留学ノ許諾ヲ得」たと記している。許可を得たうえで、藩庁に請願を繰り返して、「木戸翁等ノ斡旋」により、「先ス長崎ニ至リ復命ヲ待ツヘシ」と命じられる。

長崎にたどりついた周蔵は、好生堂の日野宗春や竹田祐伯にしばしば書簡をおくり、渡航許可を藩庁に督促するよう要請する。周蔵は、日野宗春宛の書簡⁽²⁶⁾では養父を「愚父」と呼ぶ。「小心之愚父」、「兼^{かね}而^て之小心」とも表現する。周蔵はもともと研蔵が主宰する好生堂の門生であり、実の子ではない。研蔵の婿に迎えられ、養嗣子になったとしても、師弟の関係は解消されない。おまけに、書簡の宛先は第三者ではなく、研蔵の弟子である日野宗春である。それはた

んに周蔵の無頓着な性格によるものではなく、背後にふたりのあいだの執拗な確執の臭いが嗅ぎとれる。

研蔵には後継の男子がいなかったために、養子をむかえることになる。研蔵ははじめ門人の福田正二を候補者とした。

福田は、弘化三（一八四六）年に小郡宰判の地下医の子に生まれ、青木家の門人となり、おもに研蔵から教えをうける。当時の好生堂が陪臣や地下医にも本格的に門戸を開放した元治元年（一八六四）年春に、おそらく周蔵とともに入門する。慶応二（一八六六）年九月に好生堂が山口に移転したのち、助教に挙用される。²⁷福田は語学にすぐれ、『尼氏医鑑』

（全八巻）、『弁薬則』（全二巻）などの訳著がある。²⁸

もうひとりの候補が周蔵である。青木周蔵は、次のように回顧している。

能美氏等ハ予ノ蘭学ノ知識漸ク進メルヲ見テ予ヲ青木家ノ養子タラシメントセシカ当時予ノ位置トシテ青木家ノ養子トナルコトハ太タ名譽ナルモ予ハ三浦家ノ長男タルノ故ヲ以テ之ヲ辞退セリ然レトモ交遊諸氏及ヒ能美氏ヨリ家嚴ニ対シ云々ノ説論アリタル爲メ予ハ終ニ青木家ノ養子トナレリ

周蔵を養子に推薦したのは周蔵の最初の蘭学の師匠である能美隆庵である。隆庵が中心となり、周蔵の実父三浦玄仲を説得する。福田正二が辞退したために、周蔵が名門青木家の養子という「名譽」を掌中にする。青木家は、青木周弼が嘉永三（一八五〇）年六月に譜代藩医となったために、周蔵も藩医としての地位は約束される。

医家に婿入りした以上、後継者として家学の修業にはげまなければならない。しかし、周蔵は医学の修業に専念しようとしなない。蘭学については上達が早く、大村益次郎から貸り受けた『セバストポール』戦争ノ顛末ヲ叙述シタルモノ、すなわち蘭語のクリミア戦争記をひそかに読み耽り、「素志貫徹ノ念」をつのらせる。

研蔵は、周蔵が「稟賦ノ醫者嫌ヒ」であることに気づき、日ごろ、医家に養子入りしたものの心得などについて説諭していたと思われる。長崎に旅立つさいには、「変業セザル可シ」と諭す。²⁹研蔵は、「温厚謹直、細心慎重」な性格

で、「勤勉な人」であった。「寡言」で、兄周弼のように、みずから理想について建言するような積極性はなかった。実際、好生堂教諭職にありながら、「醫政家」としての業績は少なかった。⁽³⁰⁾ 周蔵は、養父の生真面目さにもものたりなさを感じたであろう。それだけではなく、養子に細々と説教する研蔵に反感をいただき、内心では小心者と侮るようになっていた。

研蔵は、周蔵の長崎遊学については藩命でもあり、不承不承ながらも容認せざるをえなかった。しかし、海外留学が現実味をおびてくると、それに反対する姿勢を鮮明にする。研蔵は、慶応三年九月に日野に書簡をおくり、軍政総掛の木戸孝允への伝言を依頼し、書状を託す。⁽³¹⁾

拙も明朝より帰萩今一応相話仕度候処相憎懸違念之至ニ奉存候然は此せつ木戸馬関迄帰居近日之内此元へ帰候よし今日承り申候何卒帰着次第彼方へ御出周蔵外国行之儀ハ不被差免様御伝へ可被下候此状へも其段頼遣申候此中来逐々申上候道心事御憐察被下何分宜しく御頼申候先ハ為其余は帰萩の上方縷可申上候草々頓首

書簡の主旨は、木戸が近々帰山するので、周蔵の海外留学を許可しないよう日野に伝言をたのみ、あわせて木戸宛の書簡を託すというものである。木戸が数日中に長崎から山口にかえることを承知しながら、研蔵はあくまでも帰萩の予定をまもり、山口で木戸を待とうとはしない。

周蔵は、萩をはなれ、さらになにものかに憑かれたように海外へ逃れようとする。長崎からは、しばしば「是非々々遠遊被⁽³²⁾仰付⁽³²⁾候様御高配奉⁽³²⁾仰候⁽³²⁾」、「何分急⁽³²⁾二官許可⁽³²⁾有⁽³²⁾レ之御高配意伏而奉⁽³²⁾願⁽³²⁾候⁽³²⁾」⁽³³⁾というように、海外留学の許可をもとめる。研蔵の弟子である日野宗春からも萩にもどるようしばしば催促されるが、帰郷の条件は「官許」、すなわち藩政府の留学の許可である。

周蔵は、明治三(一八七〇)九月五日に養父研蔵が事故により死去したために、十一月五日に青木家の家督を相続す

る。明治六年一月には外務一等書記官心得に登用され、ベルリンに在勤する。明治七年には青木家から離縁をせまられ、慈父のように慕う木戸孝允から「弟之はごくみ」、すなわち飯の養子である養はぐみになるようすすめられる。⁽³⁴⁾周蔵は、その後も青木家の当主に居座る。明治十(一八七七)年十月には照子を離縁し、プロイセン貴族の娘エリザベート・フォン・ラーデと結婚する。周蔵は、ドイツで「国家ニ益スル学問」をまなび、「政治ニ参与スヘキ位置」につき、「素志」をとげる。しかし、青木家を踏台として利用したという意識にさいなまれる。

青木周蔵にとって、長崎時代は、青木家から、同様に医学から解き放される「運命」の時期であった。そこには、封印されるべき過去しかない。養父研蔵の名も『筆記』では封印され、一度しか登場しない。

五 誇 示

慶応三年六月十日、周蔵は梅雨空のなか好生堂の同僚松岡勇記とともに長崎に到着する。⁽³⁵⁾青木周蔵は、留学国としてプロイセンを選択した理由について次のように述べている。

留学地選定ノ事ハ一個ノ先決問題トシテ予ノ最モ意ヲ用キシ所ナリ從來長藩ヨリ海外ニ遊学セル者七八人アリテ孰レモ英国又ハ米國ニ留學セリ然レトモ予ハ專修学科ノ如何ニ関セス李魯西以外ニハ断シテ留學セストノ決心ヲ以テ其ノ旨ヲ政府ニ稟申シ其ノ許可ヲ得テ同國ニ赴キタリ当時我國ニ於テハ英佛米三國ノ名最モ人耳ニ熟セシカ故ニ此ノ三國ニ留學スルハ邦人ノ見テ以テ首肯スル所ナルモ李國ニ留學スルカ如キハ世人太タ之ヲ奇怪トシタリ然レトモ予カ多数人士ノ意向ニ反シ敢テ李魯西行ヲ決定シ併セテ政府ノ許可ヲ請求シタルニハ重大ナル理由アリ即チ從來予ノ閲讀セシ和蘭醫書ハ大半独人ノ著述ヲ翻訳セシモノナルノミナラス予ハ某蘭書中ノ一項ニ於テ「凡ソ學問ニ於テハ能ク独逸ノ右ニ出ツルモノナシ」トノ數語ヲ讀ミタル事アリ此等ノ証左ニ據テ推測スルニ研究最

モ困難ナル医学ニシテ斯ク著シク發達シ蘭人仰テ以テ其ノ師ト尊崇スル李魯西国ニ於テハ其ノ他ノ学科モ亦必ス他国ニ卓越セルモノアルヘク

萩藩では、これまでにイギリスやアメリカに留学生を派遣していたが、周蔵は留學国としてプロイセンを選択する。プロイセンを選択した理由は、ふたつある。ひとつは、周蔵が閲読したオランダの医学書は大半はドイツの原著を翻訳したものであるという点である。もうひとつは、あるオランダ書のなかに、学問についてはドイツが世界最先端にあるという記述があるのを読んだことである。

周蔵は、医学という総合科学の分野で世界的に先進的な水準にあるドイツにおいてはその他の学術も他国よりすぐれていると考える。周蔵は、「醫學爲修業」⁽³⁶⁾のために、ドイツへ派遣される。すでに医学を放棄していたとすれば、医学以外の学問の世界的先進性に言及せざるを得ない。

ドイツ留学という結論は、一年あまりの長崎滞在中にたどりついたものである。周蔵は、慶応三年七月に日野宗春と竹田裕伯にあて書翰を送り、次のように述べている。⁽³⁷⁾

幕よりの頼二而

佛国杯ハ吾國より遠遊仕

事少し六ヶ敷候、和蘭モ

其氣味有レ之と申事ニ候得共、

和蘭ハ強而之事モ有之候間

敷奉レ察候、兎角官許有レ之候

節ハ和蘭ト御書下ケ可レ有レ之

御願可レ被レ候ハ、尤半春兄御

氣付有レ之候ハ、決而不同意

ハ不ニ申上レ候、併シ生モ先日迄ハ英

行と決意罷在候得共、近日承

之候得ハ和蘭、獨乙、米利堅、

佛坏よろしくと申事ニ御坐候

尤形勢ニ因而建議仕候トキハ

吾国及薩土嘉輩ハ英

行可レ然候得共、次ノ一首篤

と御坐考可レ被レ下候

醫者スレハ初ハ和蘭

后獨乙もどりに遊

べ英の龍動」ト申事ヲ承申候

長崎に一ヶ月ほど滞在した時点では、周蔵は、留学先
について深刻に考えていない。周蔵によれば、留学国の
選択基準としては、外交的な基準と学術的な基準がある。
ひとつは、イギリスが鹿児島藩と萩藩を支援し、フラン
スが幕府を経済的・軍事的に後援するという外交関係を

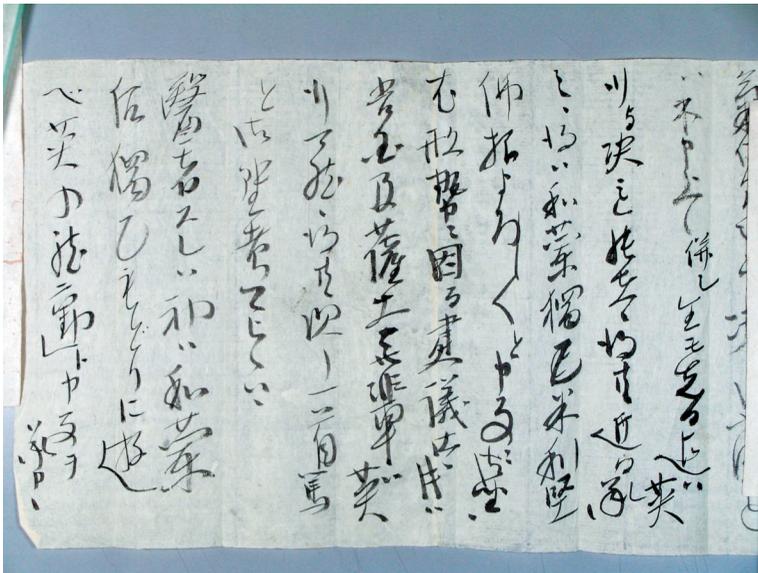


図2 青木周蔵書翰

顧慮するという考え方である。周蔵は、親幕政策をとるフランスが幕府に反旗をひるがえした萩藩の留学生をうけ入れることはありえないと考える。オランダも、鎖国政策のもとで幕府と独占的排他的な関係を維持してきた。オランダも拒絶する可能性があるが、伝統的な観点からオランダも留学国の選択肢にふくまれる。外交的な基準から判断すれば、萩藩、鹿兒島藩、高知藩、佐賀藩のような倒幕をめざす諸藩の者はイギリス以外に留学することは考えられない。

もうひとつは、医学留学生として医学研究の先進性を重視する考え方である。周蔵は、外交的な基準から、一時はイギリスへ留学しようと決意したばかりである。しかし、最近の情報、おそらくは学術的な基準にもとづく情報によれば、オランダ、ドイツ、イギリスが留学国としてふさわしいということである。それは、末尾の戯れ歌からも窺われるとおりである。ただし、ドイツが候補にはいつた点は注目しなければならない。

周蔵だけが留学国の選択肢をもっていたわけではない。周蔵は、蘭学を学んだために、オランダに留学するつもりであった。長崎では、イギリスも選択肢にはいる。しかし、最終的には、日野宗春や「半春兄」、すなわち半井春軒などの萩の担当者の意見にしたがわなければならない。周蔵は、留学国について、みずから留学国を精選し、藩庁に「建議」しようと意気込んでいた。

結局、周蔵はドイツへ留学することになる。学術的な観点からの選択である。同じ時期、長崎精得館において、ポインから医学伝習をひきついでマンスフェルトのもとで修業していた幕府伝習生の池田謙斎はドイツ医学について次のように認識をもっていた。

精得館には、既に多少の醫書が備はつて居たから、ストロマイエルの外科書だの、ニーマイルの内科書などは、
ここの借りて讀むで居た、併しこれらの書物は、大抵獨逸の原著について蘭人の自國語に翻譯したのじやつた⁽³⁸⁾

精得館には、ドイツ軍陣外科の父シウトローマイエルの「外科学ハンドブック」、グライフスヴァルト大学教授ニーマイエルの「内科学教科書」といった専門書が用意されていた。長崎の伝習生たちは、オランダ人医師による医学伝習や「新版のもの、蘭書」をとおして、やがて「和蘭の醫書は大抵獨逸の翻譯書で、其本家の獨逸は大學も澤山あり、良醫も多く輩出し居る」⁽³⁹⁾ことを諒解し、ドイツ医学にたいする認識を深める。周蔵も精得館に出入りしていたので、池田と同様の認識をもつことになったとしても不自然ではない。

周蔵は、長崎において、松岡勇記に紹介された高知藩の遊学生萩原三圭と親交をむすぶ。萩原は海外留学生として「兼て御見込も有之候」⁽⁴⁰⁾人物であり、周蔵と同様に藩から留学の命令がくだされるのを待っていた。ふたりは留学国について熟議したのである。

諸藩ともに、軍事力の近代装備化のための支出がかさみ、留学資金を工面するのに苦慮していた。とりわけ萩藩は、慶応元年以降、大村益次郎の指導のもとで徹底的な兵制改革をおこなう。従来の封建的兵制、すなわち軍役制度を廃止し、銃隊に再編成し、新式施錠銃を導入する⁽⁴¹⁾。明治三年の廢藩置縣のさい、明治新政府は全国諸藩に銃砲、彈藥等の所持状況を報告させるが、全国二五八藩が所持する大砲は約六六〇〇門、小銃は約三十七万挺にのぼった⁽⁴²⁾。

青木周蔵によれば、萩原三圭とドイツへ留学することについて、以下のような場面があった。

曩日長崎ニ於テ足下ヲ予ト同シク李国ニ留学セシムベシト貴国(高知)ノ藩老深尾氏鼎ニ説キシ時深尾氏カ李国トハ方角違ヒニ非スヤト云ヒシ⁽⁴³⁾

周蔵は、長崎訪問中の高知藩家老深尾重元に萩原とともにドイツへ留学したいと請願する。それにたいし、深尾重元はドイツは予想外であるとして反対するが、周蔵は「凡百ノ學科ヲ修ムルニ於テ獨逸諸邦ニ優ルノ国ナキ」と説得する⁽⁴⁴⁾。周蔵が主体的にドイツを選び、萩原を誘ったかのようにも読めるが、実態については、萩原に関する資料から

も管見に入らない。

ドイツへおもむいた周蔵は、当初、医学と軍事学に限定されていたドイツ留学生の修学科目や修業種類の多様化につとめ、またベルリンを訪れる留學生に留學国をドイツに変更するようすすめる。周蔵は、多くの留學生がドイツにおいてまなぶことによつて、「独逸ニ於ケル如キ主義正確ニシテ秩序精密ナル學問」、すなわちドイツ・ヴィッセンシャフトが総体として日本に根ざすことを期待していた⁽⁴⁵⁾。

明治新政府は、明治三年七月ころに起草された「遣歐学徒ヲ撰擧スルノ議」⁽⁴⁶⁾の国別修学科目一覧や雜科一覧にもとづき留學政策を推進する。學術・技術を断片的にでも移植すれば、予定調和的に先進的な近代国家ができあがるという選択的移植原理にもとづき、各国のすぐれた學術・技術を断片的にでも移植すれば、予定調和的に先進的な近代国家ができあがるという発想である。修学科目は「各國ノ所長」を勘案した国別修学科目一覧から選択しなければならない。留學国としては、イギリス、フランス、プロイセン、オランダ、アメリカの五ヶ国があげられる。イギリス、フランス、プロイセン・ドイツが主要留學国とされ、それぞれ留學生全体の二十五パーセントずつ割り振られ、オランダ、アメリカには残りの二十五パーセントを分けあう。国別修学科目一覧は、これらの五ヶ国について国別に修學すべき学科、すなわち移植すべき学科を列挙したものである。

ドイツの項目には、「醫科」、「藥制法」といった医学系の学科だけでなく、「政治学」、「經濟学」などの社会科学系の学科も設定される。周蔵の選択が新政府によつて追認されたことになる。

明治十四(一八八二)年十月、明治政府は政変を契機として新しい制度の構築のためのモデルとしてドイツを選択する。青木周蔵は、渡独以前からプロイセン・ドイツの卓越性を承知し、ドイツ・ヴィッセンシャフトの移植基盤を整備したという自負心をいだいていた。

おわりに

『青木周蔵筆記』はあくまでも自伝である。『筆記』第一に関するかぎり、記憶違いや事実の誤認が散見されるだけで、意図的な粉飾や事実の歪曲はみられない。青木周蔵が、十六歳のころ、「政治ニ関係アル学問」を修め、「政治ニ参与スヘキ位置」に就きたいと思うようになったと回想したとしても、それは事実ではない。それは、青木がつくりだした独自のレトリックである。

『筆記』第一を精読すれば、いくつかのキーワードが浮かび上がる。疵痕、暗示、傍観、沈黙、誇示といったキーワードがそのままレトリックとして機能する。最後に、こうしたレトリックを駆使することによって、青木周蔵がなにを訴えたかったのか整理しておく。

討幕派の志士たちが中心となり新しい国家を建設しはじめたとき、ドイツに滞在する青木周蔵は在独の外交官として新政府の一員に組み込まれる。福沢諭吉が獲得した外国奉行支配下の翻訳方のような瑣末な地位にすぎないが、志士としての論功によるものではない。みずから学問を研鑽したことにより獲得した地位である。

青木周蔵は、「正規に外国の大学で学び、生粋の外交官生活を直線的に歩いてきた者として、外務大臣に任せられた第一号⁽⁴⁷⁾」である。明治十八年にドイツから召喚され、翌年、最初の内閣の初代外務次官に就任する。内閣には、総理大臣伊藤博文、内務大臣山県有朋、外務大臣井上馨、農商務大臣山田顕義という四名の萩藩出身者がいた。いずれも奇兵隊や諸隊の関係者である。

明治二十二年、青木がはじめて外務大臣に起用されたとき、総理大臣は山県有朋であった。山県は、萩城下の蔵元付中間という武家奉公人の家に生まれながら、奇兵隊の軍監として頭角をあらわした典型的な倒幕志士である。そのことを承知のうえで、青木は奇兵隊を「奇兵隊ナルモノ」と表現する。萩藩永代家老の福原家の郷学菁莪堂において

はじめて武士に接したときから、武士やかれらが奉じる尊皇攘夷運動に憎悪感や侮蔑感をいだいていたが、そうした感情は潰えることはなかった。青木周蔵は、藩閥の後ろ盾で高位高官の地位を獲得したのではないことを記しておきたかった。

青木は、明治二十(一八八七)年五月、子爵に叙せられ、明治三十四(一九〇二)年十一月には枢密顧問官に選任される。それは、条約改正などの外交官として取り組んだ職務にたいする褒章である。しかし、青木には憲法論争が吹き荒れた明治十年代に「ドイツ一辺倒の風潮」⁽⁴⁸⁾を用意したことを評価してもらいたかった。

青木は、『筆記』第一において、「凡ソ学問ニ於テハ能ク独逸ノ右ニ出スルモノナシ」としてドイツ・ヴィッセンシャフトの世界的先進性を予言する。ベルリンで生活をはじめると、それを確認し、「独逸ニ於ケル如キ主義正確ニシテ秩序精密ナル學問」、すなわちドイツ・ヴィッセンシャフトを日本に移植しようと決意する(『筆記』第二)。初期のドイツ留学生のひとりである青木は、ほどなく「獨逸青翁」と呼ばれるほどにドイツ鼻頂になつていた。

周蔵は、明治五年一月にドイツ北部連邦留学生総代に任命され、在外公使に相当する弁務使の職掌を代行する。「一國ノ文明ハ單ニ醫學若クハ兵學ノ研究ノミニテ増進スルモノニアラサル」⁽⁵⁰⁾と考え、「各其ノ長所若クハ嗜好ニ從ヒ或ハ政治經濟ノ学ヲ修メ或ハ各種ノ工業ヲ實際的研究セシムル」。明治四年一月(一八七一年三月)から二月にかけてベルリンに到着した大学東校留学生、北白川宮能久の随員などに専攻を変更するようすすめたり、ベルリンに立ち寄ったロシア留学生にたいして、ドイツにとどまるよう説得したりする。

お雇いドイツ人を日本に送り込み、日本にドイツ・ヴィッセンシャフトの移植基盤を整備したのも、青木周蔵である。青木は、まず経済学を専門とするマイエットを東京医学校予科教師として送り込む⁽⁵¹⁾。

明治政府は、明治十四(一八八二)年には、政変を契機として新しい制度の構築のためのモデルとしてドイツを選択

する。青木は、本国からの指令により公法顧問の選任にもあたり、レースラーと契約をむすぶ。レースラーは、プロイセン欽定憲法を下敷きにした「日本帝国憲法草案」を起草し、大日本帝国憲法に採用される。

青木は、明治三十三（一九〇〇）年の北清事変までで筆をおく。青木の七十歳あまりの生涯のうち、五十七歳のときまでである。ビスマルクの引退後、ウイヘルム二世の親政の時代になると、明治二十九（一八九六）年の三国干渉、「黄禍論」などが原因し、日本とドイツの関係は冷却化し、第一次世界大戦では日本はドイツに宣戦する。青木周蔵は、愛してやまなかつたドイツが敵性国家に変貌していくのを傍観しながら筆を置いたかのようなのである。

なお、山口県文書館所蔵の日野家文書の解説にさいしては、生涯学習一級インストラクターの山田信道氏にご協力いただいた。感謝申し上げます。

【註】

- (1) 「解説」、坂根義久校注、『青木周蔵自伝』、平凡社、一九七〇年、三四八頁。
- (2) 小倉孝誠、「自伝の構図」、『東京都立大学人文学部人文学報』フランス文学、通巻二四六号、一九九三年三月、五二～五六頁。
- (3) 布施昌一、『医師の歴史』、中央公論社、昭和五四年、一三三頁。
- (4) 石井良助編、『徳川禁令考』前集第五、創文社、昭和三四年、三八六頁。
- (5) 田中助一、『防長医学史』上巻、聚海書林、昭和五九年（昭和二六年初版）、二三〇頁。
- (6) 同右書、一四三～一四四頁。
- (7) 『好生堂醫學引痘沙汰控』、『毛利家文庫』、一五文武、山口県公文書館所蔵。
- (8) 佐伯彰一、『近代人の自伝』、講談社、一九八一年、一一一頁。
- (9) 宇部市史編集委員会、『宇部市史』通史篇、上巻、宇部市、平成四年、一〇二〇～一〇二四頁。

- (10) 同右書、九九五頁。
- (11) 末松謙澄、『防長回天史』第二編、二、マツノ書店、平成三年(明治四四年初版)、三三四～三四〇頁。
- (12) 『防長回天史』第二編、二、三五五頁。
- (13) 『軍制改革ニ付申上候事扣』、『福原家文書』、宇部市立図書館所蔵。
- (14) 『館中日程表』、『福原家文書』。
- (15) 『学則』、『福原家文書』。
- (16) 高梨光司、『兵部大輔大村益次郎先生』、大村卿遺徳顕彰会、昭和一六年、五頁。
- (17) 『宇部市史』通史篇、上巻、一〇二二～一〇二四頁。
- (18) 富田正文校訂、『福翁自伝』、岩波書店、二〇〇六年(一九七八年初版)、二四頁。
- (19) 大島明秀、『青木周蔵の中津滞在期——富永家所蔵史料を中心に』、『ヴォルフガング・ミヒエル編』、『中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書』第五巻、二〇〇六年三月、七八頁。
- (20) 川畷真人、『中津藩——蘭学の光芒』、西日本臨床医学研究所、平成一三年、四頁。
- (21) 大分県下毛郡教育会編刊、『下毛郡誌』、七五六～七五七頁。
- (22) ミヒエル・ヴォルフガング、『中津藩医大江春塘について』、『ヴォルフガング・ミヒエル編』、『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館叢書』第六巻、平成一九(二〇〇七)年三月、六一頁。
- (23) 高杉晋作書簡、周布政之助宛、安政六年二月一六日付、一坂太郎編、『高杉晋作史料』第一巻、マツノ書店、平成一四年、八四頁。
- (24) 田中助一、『防長医学史』下巻、聚海書林、昭和五九年(昭和二八年初版)、一九五頁。
- (25) 浦上五六、『適塾の人々』、新日本図書、昭和一九年、二九四頁。
- (26) 青木周蔵書簡、日野宗春宛、慶応三年八月十八日付、『日野家文書』、諸家文書、山口県公文書館所蔵。
- (27) 岡原義二、『青木周弼伝』、大空社、一九九四年(昭和二六年初版)、六二三～六二四頁。
- (28) 両書ともに山口県立山口図書館に所蔵される。
- (29) 青木周蔵書翰、半井春軒宛、明治三年月日不明、『防長医学史』下巻、二四～二五頁。

- (30) 「附記 青木研蔵伝」、『青木周弼伝』、七三五～七三六頁。
- (31) 慶応三年九月一日付、青木研蔵書簡、日野宗春宛、同右書、七〇七～七〇八頁。
- (32) 慶応三年六月二八日付、青木周蔵書翰、日野宗春宛、「日野家文書」、諸家文書、山口県公文書館所蔵。
- (33) 慶応三年八月一八日付、日野宗春宛、「日野家文書」。
- (34) 木戸孝允書簡、青木周蔵宛、明治七年九月三日付、日本史籍協会編、『木戸孝允文書』五、東京大学出版会、昭和四六年（昭和五年初版）、三三九頁。
- (35) 一坂太郎・蔵本朋依、『久保松太郎日記』、マツノ書店、平成一六年、六五四頁。
- (36) 「洋學則」自安政五年七月至明治元年、山口県文書館所蔵、『毛利家文庫』、一五文武、一三八。
- (37) 青木周蔵書翰、竹田裕伯・日野宗春宛、（慶応三年）七月初出日付、「日野家文書」。
- (38) 池田謙斎述、医海時報社員筆記、入沢達吉編刊、『回顧録』、大正六年、二二頁。
- (39) 同右書、四六～四七頁。
- (40) 慶応三年一〇月一三日付、佐佐木高行書簡、後藤象二郎他宛、佐佐木高行、『保古飛呂比』二、東京大学出版会、一九七二年、五三六頁。
- (41) 藤原彰、『日本軍事史』上巻、戦前篇、日本評論社、一九八七年、一〇頁。
- (42) 南坊平造、「明治維新全国諸藩の鉄砲戦力」、『軍事史学』第二三卷第一号、一九七七年六月、七七頁。
- (43) 『青木周蔵筆記』第二。
- (44) 同右。
- (45) 同右。
- (46) 「某意見書 遣歐学徒ヲ撰擧スル事 留學國々修学ノ科目ノ事」、「諸氏意見書類」五十五、『三条家文書』、国立国会図書館憲政資料室所蔵。「遣歐学徒ヲ撰擧スルノ議」、「大隈文書」、早稲田大学所蔵。「留學國々修學科目」、「広沢真臣文書」、国立国会図書館憲政資料室所蔵。
- (47) 外務省百年史編纂委員会編、『外務省の百年』上巻、原書房、昭和四四年、一七八頁。
- (48) 「明治十四年政変とドイツ学の振興」、井上久雄、『近代日本教育法の成立』、風間書房、一九九〇年（昭和四四年初版）、七

六四頁。

(49) 木戸孝允書簡、青木周蔵宛、明治七年八月一日付、『木戸孝允文書』五、三二三頁。

(50) 『青木周蔵筆記』第三。

(51) 『青木周蔵筆記』第八。

Zusammenfassung

Über die Dichtung und Wahrheit der Autobiographie
von Shuzo Aoki

Jun MORIKAWA

Irgendwann begann der Diplomat Shuzo Aoki, die Autobiographie zu schreiben. Er hoffte im Grunde des Herzens, daß sie herausgegeben würde. Erst nach einem halbes Jahrhundert seines Todes wurde sie als ein Band des Tōyō Bunkos herausgegeben. Ich möchte ausforschen, welchen Gedanken er in seiner Autobiographie mitteilen wollte.